

一章 弱虫勇氣

幻想郷で生きる八雲紫はこう考える。

——人間は最高の食材……

妖怪の好物は人間の絶望と恐怖。もちろんその肉を好んで食べるのだけれど、絶望と恐怖を持った者は特に味が良い。ようするに絶望と恐怖は調味料やスパイスのようなもの。何も下ごしらえていない肉より塩味やタレに漬け込んだ物の方が格段に味が変わる。

妖怪に比べれば人間は心が弱い。そして力も弱い。知能さえも下手をすれば劣る。幻想郷の外の世界、妖怪が住まない科学という物に頼る人間は特にメンタル部分が弱い傾向がある。だから格別に美味しい食材。幻想郷内では人間を食べる事は禁忌となっているが、外の世界のそれには制限はない。

——いわゆる食材の宝庫……

狙いは絶望に満ちた人間。自殺寸前の者なら美味で、いなくなっても大事にはならない。居た……美味しそうな絶望の芳香が漂ってくる人間。学校という施設に……

高校生、斉藤勇氣は階段に転がっている自分の机と思しき物へとただ、呆然と見つめていた。散らばり、開かれたノートと教科書には悪口がびっしりと、赤の油性ペンで書かれた文字が羅列されている。その中で特に勇氣が目についた文字は弱虫という文字だった。

いつもの事……そう思う事では自分を慰める事しかできない。それはしかたない事と……弱虫と呼ばれるようになったのは小学生の頃からだった。

犬に吠えられた時、地震が起きた時、蹴ったサッカーボールが恐いおじさんの家に入った時、高い場所へ上がった時……いつも自分は逃げ出していた。小学校、中学校の時に付けられたあだ名が弱虫だった。そして高校生になった今でもそれは変わらなかつた。

教室へ行き、机を持ち上げて席があつた場所へと置くと、クラスメイト達から失笑が漏れる。

「弱虫君よ。ちよつくら……お金、貸してくれよ」

ガムをくちやくちやくとさせながらクラスメイトのモヒカン、田中とリーゼントの吉田がへらへらしながら近づいてきた。

「ごめん……お金は無いから！」

授業のチャイムが鳴るのも、構わず教室から逃げ出していた。

「おい！ 待てよ！」

こんな奴らに勝てるはずがない……逃げられない。自分にはこれしかできないから。

階段を上がると、屋上のドアに辿り着く。こちらに気づき、階段を上がってくる田中と吉田。

ドアを開け放ち、再び逃げる。もちろんそこに逃げ道など無い事は分かっていたはずなのに……

屋上は背丈が自分より低く、あるのか無いのか分からないフェンス。裏庭が見下ろせるが、四階の高さからはさすがに降りる事は不可能だ。

「ここに居たんだ弱虫君」

田中の声が聞こえて思わず振り向いた拍子で、フェンスに頭をぶつけてしまう。

いつの間にか、田中と吉田との距離が数メートルしかない事に気づいた。

「お金貸してくんねえ？ 一万円ほどさ」

へらへらと笑いながら銀色の指輪をはめた手をこちらに向ける吉田。

「そんなお金持ってないよ！」

「嫌なら、身体で払って貰っても良いんだぜ？」

そう言っただけで田中はポキポキと指を鳴らす。

——逃げるしかない！

それしか頭に無かった。こいつらに殴られるぐらいなら【死んでも良いと思つたぐらいに】フェンスの下をこらして見ると、四階に飛び移れそうな気がしたけれど……下を見ると、どうしても腰が抜けてしまう。震えが止まらなくなる。

「どうしたの弱虫君？ 自殺でもするつもりかなあ？ まあ、お前にはそんな度胸すら無いんだろうけどなあ」

吉田がきやらきやらと笑い声を上げる。

「諦めな。誰も助けに来ないぜ」

再度、振り向けば吉田と田中に手が届きそうな位置まで迫っていた。

——こんな名前が付いているのにこいつらに立ち向かう勇氣も……飛び降りる覚悟すらないらしい。

「せめて……ボクがここを飛び降りるぐらい勇氣があつたら……」

ヴーン！

独り言のように呟いた時、何処からか虫の羽音に似た響きが耳に届く。

（ここから飛び降りたいの？ それじゃあ、手伝ってあげようかしらね）

そして女性の声と共に背中に悪寒のようなモノが走る。まるで……耳元で誰かが喋ったかのように……

いや……生々しい声は本物のように思えた。温かみのある吐息、女性独特の匂いを感じる限りではまるで

本当に喋っているような……！！？

「えっ！？」

見回しても吉田と田中以外の人間は誰も見当たらない。じゃあ、さっきの声は一体、誰が喋ったというのだろうか？

「何をきよろきよろしてやがる！」

田中が掴みかかった瞬間だった。

ヴーン！

再び、虫の羽音に似た響きが聞こえる。

「おい！ バカ！」

吉田の驚愕の声。慌てる田中。いったいなにが……？

ガシャーン！

何かが崩れるような音が聞こえた。身体は宙に浮く感覚、それに距離も田中と吉田から離れていく。

——これは……落ちている！？

そう思った時にはもう既に遅く、掴む物すら無く、落ちていくのみだった。

これは神様が与えた罰なのだろう……死んでも良いから逃げなきゃいけない理由なんて無かったのに……落下していく身体は……頭から落ち、潰れたトマトのようになってしまふのだと覚悟した。

死の恐怖があったが、不思議に安心してしまふ。もうあいつらに殴られる事もノートに落書きをされて、机を階段から落とされる事も、もう無いのだから……

真上にあつた青い空が黒い色へと染まっていく。

不思議に痛みは無く、マットに落ちたような感覚。

「あれ？」

身体を起ここしてみる。

動ける？ それどころか、頭に外傷が無ければ、身体の痛みすらなかった。

それに暗い場所なのに自分の服や身体が明かりに照らされたように分かるのはなぜだろうか？

歩いてみると、黒い地面は不安定で、まるでこんにやくの上を歩いているような感覚で、何だか凄く気持ち悪い。

「命拾いしたわね……それともあのまま死んだ方が良かったのかしら斉藤勇氣君」

声のした方向を見ると、目の前には日傘を差した女性が立っていた。西洋人のような洋風な顔立ち、長い髪は金、服は中華風な上着なのに対し、不釣り合いなフリルのスカート。それは人のように思えたのだけれど、まるで別の生き物のように感じたのはどうしてだろうか？

なぜだかは分からないが、震えが止まらない。この人からは得体の知れない威圧感と怖気のようなものを感じていた。

「あ、あなたは誰なんですか！？ それに何でボクの名前を知っているんですか！？」

「私は八雲紫、妖怪よ。あなたをずっと見ていたの。だからあなたの名前も分かる……そしてあなたが弱虫と呼ばれている事も……小学生から寝小便を垂れて、グズでノロマでテストで0点を取る事も私は知っているわよ」

「妖怪？ それは猫型ロボットの話ですか！？ 弱虫なのはそうかもしれないですけど、グズでノロマでテストで0点は取りませんよボク！」

ふざけているのだろうか？ 恐らくは誰が見ても一目瞭然のような震え方をしているのだから、リラック  
スさせようとしているのかもしれないのだけれど、それでも威圧感や怖気のようなものは変わらない。

「あら、そうなの？ 同じだと思っていたわ」

紫という女性はゆっくりと歩む寄ってくる。

後退りして尻餅をつく。それほどまでにこの女性が恐く感じられる。殺気とは違う何か、襲っている。

「ここは何処なんですか！？ ボクを助けたのは感謝します……だけでも学校に戻らないと、行けないの  
で……ボクを元の場所に戻してください！」

「残念だけれど、返す事はできないわね。だって……貴方は妖怪の食料だもの」

「妖怪？ 食料？ どういう意味ですか！？ からかうのは止めてください。ボク……本当に怒りますよ！」  
立ち上がり、そう言ってみたものの、声が震えて威圧させる事すらできない。

「あら、貴方は気づいているのではなくて？ 私が人間では無いという事を……じゃなければ、私を見て震  
える事なんてないはずですよ」

空間の切れ目が発生し、紫がそこに手を伸ばす。そこから取り出した扇を口元に当て、微笑む紫。

さっきのは手品か……何かだろうか？

「そ、そんなのウソです！？」

「恐らくは貴方が感じているのは妖気、恐らく血筋は巫女か徳の高いお坊さんだったのかもしれないわね。  
靈力もそれなりにあって、恐怖を感じやすい貴方は高級食材になりそうね」

「食材って！？ な、何なんですか！？」

嫌な予感が過ぎる。

「つまりはね。貴方には少なからず自殺願望があった……自殺は他者を殺す事より重罪なのです。そういった者を私達、妖怪は食べてしまう」

「た、食べる！？　へ、変な冗談は止めてください！？」

「冗談もへチマも無いのよ……残念だけど、あなたは食料として提供される」

紫が閉じた扇を地面に向けた瞬間……

ヴーン！

虫の羽音に似た響きが何処からか聞こえた。

そしてすぐにぬるりとした何かが足に絡みつくのを感じた。

「なっ！？　なにっ！？」

自分の足下の隙間から出たのは得体の知れない生き物の無数の触手だった。

「恐怖や絶望以外にも人間を美味しくする方法があるのよ。知ってたかしら？」

触手はぬるぬると絡みつき、パンツの中へと入り込んでくる。

「はにゅっ！？」

「それは快感……それに恐怖と絶望を与えれば、至高の食材となるのよ」

そしてそれは股間を擦るように締め上げ、胴、手、首といった箇所を蹂躪していく。

「こんな事したらで……出ちやいます！？」

ナメクジのように這っていく触手に耐えられず、思わず身悶えてしまう。そんな自分の反応を紫は面白が



つているかのように見ているのみだ。

「あら？ 何が出ちやうのかしら？」

そう言つて微笑を浮かべながら触手の隙間に手を突つ込み、股間を触る。

そうすると、ぬるぬるする紫の手が快感を増していく。

「や……止めてください！？」

「どうして？」

紫は止めることなく、股間を撫でるように触り続け、ぬちやぬちやと不快な音を立てる。

「じゃないと本当に……はうううっ！？」

構わず手の動きを速める紫。ぬちやぬちやと撫でられ続け、快感が絶頂に達していく。

「良いわ。離してあげる。その代わり……」

手を離す紫は手に付いたぬるぬるした液体を舐める。

「何ですか？」

「こう言えば助けてあげる。この世にはもう未練はありません。解放してくださいと……貴方の本音の言葉をそのまま言えば良いのです」

本当にそれは凄く簡単に言える言葉のような気がした。弱虫と呼ばれる自分にとつても……

「この世に未練は……あります」

「あら？ 助かりたくないの？」

「助かりたいです……だけどこの世に未練は無いなんて言ったら、今まで生きてきた事がまるでバカみたい

じゃないですか……確かにボクは絶望していました。だけど、生きていたいと願っていたんです」

扇を閉じたり開いたりを繰り返して、不思議そうな顔をする紫。

「それこそバカなのではなくて？ その発言で例え妖怪の食料になったとしても？」

「はい……強く生きていきたいというのがボクの夢だったんです。生きていつかあいつらを見返してやりたかったんです」

「死を恐れず、意地を通すという訳ね……うふふ。どうやら只の弱虫ではなかったみたいね」

紫が扇を振り下ろすと、触手は床下の隙間から引き込んでいく。

「えっ？ どうして？」

「あなたに三つの選択肢を与えましょう。一つは死を選び、妖怪の食材になるか？ 二つは力を得て、私の式となるか？ 三つは何もかも忘れ、元の世界へ帰るか？」

また簡単な答えのような気がした。

「ボクなら三つ目の選択肢を選びます」

「それは貴方が決める事ではないわ。運命が決めてくれるでしょう……貴方は幻想郷で生きて、死を願うか？ 力を乞うか？ 友を忘れて帰りたいと願うか？」

「それって……どういう意味ですか？」

「まずはあなたを守る力を与えましょう」

紫が指を鳴らすと、黒い影の隙間から小さな箱が落ちる。

「これは？」

小さな箱には不可解な文字が刻み込まれていた。箱をスライドさせると、数十枚のカードが収納されていた。

「それはスペルカード。幻想郷では異変を起こす妖怪と戦う為に巫女が考案した決闘ルールに使うカードです。使い方はおいおい分かるでしょう」

「幻想郷？ ボクにこれを渡してどうしろと？」  
嫌な予感が過ぎる。

「幻想郷でスペルカード戦を行い、百勝を勝ち続ければ幻想郷に帰してあげるかもね」

「百勝！？ そんなの無理です！？」

それは無謀な試練のように思えた。それによく分からないけれど、スペルカード戦というのは只のカードゲームではないような気がした。

「同じ相手と戦っても、もちろんそれはカウントされないわ」

「幻想郷とかいう場所に行つて、訳の分からないゲームで勝つてと言うんですか！？ そんなの無理に決まっています！」

思わず涙がこみ上げてくる。この人は自分に勝てないと分かっている、ゲームを持ちかけているんだ。そして妖怪の餌になるか、下僕になれと……

「無理ではありません。私の知る範囲では人間でそれを達成してるのは四人、無理ではないでしょう？」

「で、でも！？」

「これはあなたにとつても良い薬です。毒になるかは薬になるかはあなた次第。それにどのみちあなたはこ

のまま帰しても、自殺してしまうでしょう？」

「そ、そんな勝手に！？」

「そして契約……」

鈍い痛みが走る。

「痛っ！？」

気づくと、紫は自分の額に爪を突きつけていた。

そうして紫は爪で額に文字を書くように動かす

「もし、私に断りも無しに元の世界に戻った瞬間、貴方の頭は爆ぜることになる」

満面の笑みでさらりと恐い発言をする紫。

「そ……そんな……」

「お行きなさい幻想郷へ！」

## 二章 幻想郷

ヴーン！

虫の羽音の似た響きがまた何処から聞こえた。

そして……

また勇気は落ちていた。

「ええええっ!？」

そして気づけば、暗い風景から一気に明るい風景となっていた。今度はたいした高さではないのが幸いか……いや、打ち所によっては……

前のめりに落ちている……石畳と紅白の模様が顔面に迫る。

「ぎゃあっ!？」

落ちた瞬間、柔らかい感触と……女の子のか細い声が聞こえたような……痛くない? 何かがクツションになって怪我をせずにすんだらしい。

「何だろう? これは……?」

クツションとなった物は温かみがあり、何か柔らかい。

むにゅっ!?

手につくと、いっそう柔らかい物に触れる。

「はうっ!？」

それに気のせいか、女の子の声が……

柔らかい感触と声が気になり、何度か揉んでみる。

むにゅっ!? むにゅっ!?



「はううつ!？」

やっぱり気のせいじゃない……という事はこれは……!？

顔を上げてみると、赤面して呻く巫女装束の衣装に身を包む女の子がそこに居た。

「ご、ごめんなさい!？」

「あんた……ねえ! 人の上に落ちてきて、胸を揉むとは良い度胸ね!」

女の子は勇気を乱暴に押し退け、立ち上がる。

「ほ、本当にごめん! まさか人の上に落とされるとは思ってた!？」

「うわ……服がぬるぬるじゃないの!？」

巫女装束の女の子、嫌そうに顔をしかめる。

見た目からだけけれど、歳は自分とそれほど変わらないように思える。

「え〜と……」

「あんた見ない顔ね……服装からすると、外の世界の人間のようにけど」

服装と言われて気づいたが、彼女の身に纏っている物は特に変わっていた。よく見ると、ロングヘアの髪には大きな赤いリボン、巫女装束には袖が無く、白色の袖を別に括りつけ、肩と腋の部分を露出させている。

一言で言えば、コスプレのような服装だ。

「外の世界? それはそう言う設定のイベントか何かかな?」

首を傾げる勇気に巫女装束の女の子は不思議そうな顔をする。

「最近じゃ幻想郷を知らない人間というのも珍しいわね……妙にこっちの事に詳しくかったり、私の名前を知っていたり、無闇にやたらと写真を撮りたがったり、抱きついてきたり……でも、胸を触ったのはあんたが初めてかもね」

ジト目で見る巫女装束の女の子。

「ご、ごめんなさい！？ 本当に悪気があってやった訳じゃ！？」

頭を下げる勇氣に巫女装束の女の子は溜息をつく。

「別にいいわよ……どうせまた紫の仕業でしょ？」

「紫さんとは知り合いなの？」

「知り合いというより……腐れ縁ね」

「じゃあ、君も妖怪なの？」

歩む寄る女の子に思わず身構えてしまう。この女の子もあの紫と同じような妖怪だったら、何をされるかわからない。

「失礼ね。これでもれっきとした人間よ。私は博麗霊夢、この博麗神社の巫女よ」

「神社の巫女？ 君が？」

霊夢に言われて周りを見回して気づいた。周りは石畳、鳥居、奥には神社がある。

「じゃあ、何だと思ってたのよ？」

「えくと……」

睨むように見る霊夢にコスプレイヤーだと思っていたとは言えず……



「まあ、良いわ。外の世界に帰してあげるからこっちへ来なさい」

明るく手を差し伸べる霊夢……思わず手をとりそうになる……元の世界に戻れば死んでしまうというのに……

「駄目なんだよ。ここがその幻想郷という場所なら……ボクは出る事ができないんだ」

うつむく勇氣に首を傾げる霊夢。

「どういふことよ？」